

位置と環境

遺跡は川内市街地から南へ3.5km程離れた、権現原台地に立地している。遺跡の標高は40m程で、遺跡からは、川内平野を一望できる。同じ台地上には古墳時代～室町時代までの遺跡が多く見つっている。

調査の経緯

遺跡は、九州新幹線鹿児島ルート建設に伴い、鹿児島県教育委員会が平成11年度（西暦1999年）～平成13年度（西暦2001年）に発掘調査を実施した。調査面積は19,400㎡である。

遺構と遺物

調査では旧石器時代、縄文時代、鎌倉時代の遺構・遺物が発見された。

旧石器時代の遺物は、ナイフ形石器2点、剥片尖頭器1点が発見された。数は少なかったものの、川内平野では、旧石器時代の調査例が少ないために貴重な発見となった。

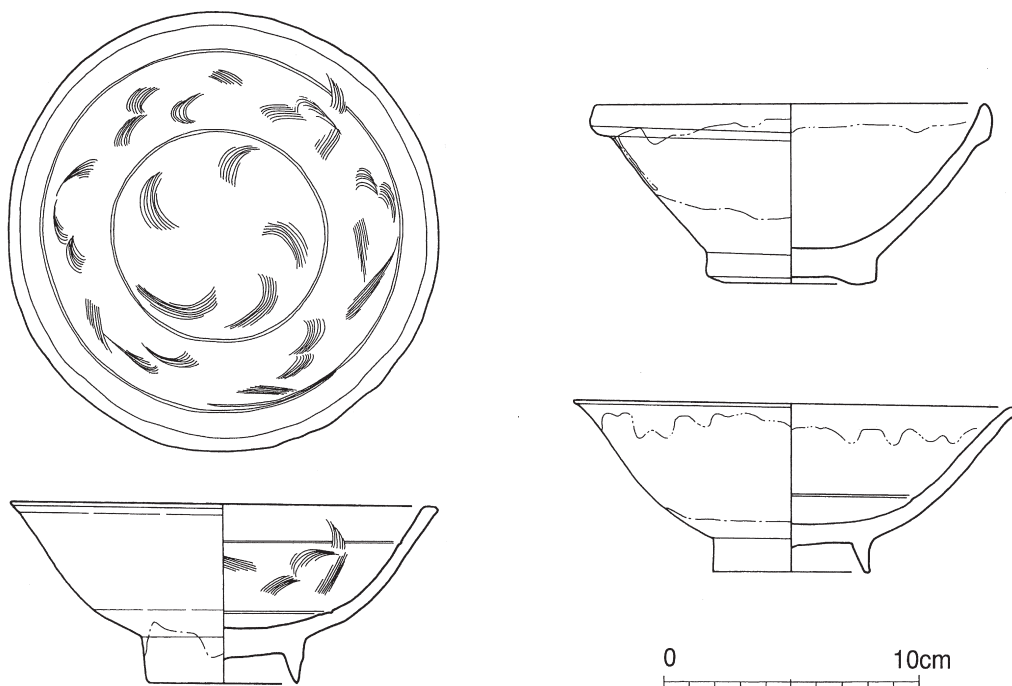
縄文時代の遺物は、押型文土器、石坂式土器、石皿、敲石、凹石、石鏃などが発見された。遺跡から



第1図 上野城跡の位置

は、石器を作る途中で出た小さな石くず（チップ）が多く見つっていることから石器を作っていたことが推測される。また、石器を作るために北部九州（福岡県の辺り）から黒曜石が運ばれていたことが明らかとなった。

鎌倉時代、上野城跡は上野氏の居城であったために調査区の近くには現在でも空堀が残っている。調査でも城跡に関わる多くの遺構・遺物が発見された。遺構は掘立柱建物跡30棟以上、方形竪穴建物跡5基、溝跡4条、古道1条、土坑墓3基、畑跡、柱穴などが発見された。また、多くの土師器や須恵器、白磁、青磁などがみつっている。



第2図 土墳墓から出土した中国産の白磁碗

遺跡からは、日常生活を送る掘立柱建物跡とは別に方形竪穴建物跡と呼ばれる遺構が見つかった。方形竪穴建物跡とは、地面を2m×2m程の大きさに掘って作る半地下式の建物である。壁に沿って多くの柱穴が見つかっていて、床の中央部には炭が溜まっている（写真2）。作業小屋などに使われたと考えられているが、その用途はまだはっきりとは分かってはいない。上野城跡からは5基見つかっていて、集落の中でどのような役割を持っていたのかを解明することが今後の課題である。

土墳墓は3基検出され、その内の1基には完形の白磁碗や鉄製の短刀が供えられていた（第2図、写真1）。そのほかに、発見された畠跡の土を科学分析で調べた結果、陸稲が作られていたことが分かっている（写真3）。また、直径1m程の円形の土坑が多数見つかっていて、その中からはたくさんの炭化した木の実やオオムギ、コムギ、イネが見つかった。これらの土坑は、当時の人々が食べ残した食糧を捨てたゴミ捨て穴と考えられ、当時の食生活を考える上で重要な発見となった。

特徴

古代から交通の重要な要所であった川内には鎌倉時代以降多くの山城が築かれた。しかし、発掘調査はほとんど行われておらずその実体は不明の部分が多い。上野城跡の発掘調査によって、山城を構成する建物の種類、規模や配置が一部明らかになった。文献に上野城跡が登場する以前からすでに建物群が存在していたことも、城が築かれた背景を考える上で重要な調査成果である。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター2004「上野城跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（68）

（川口雅之）

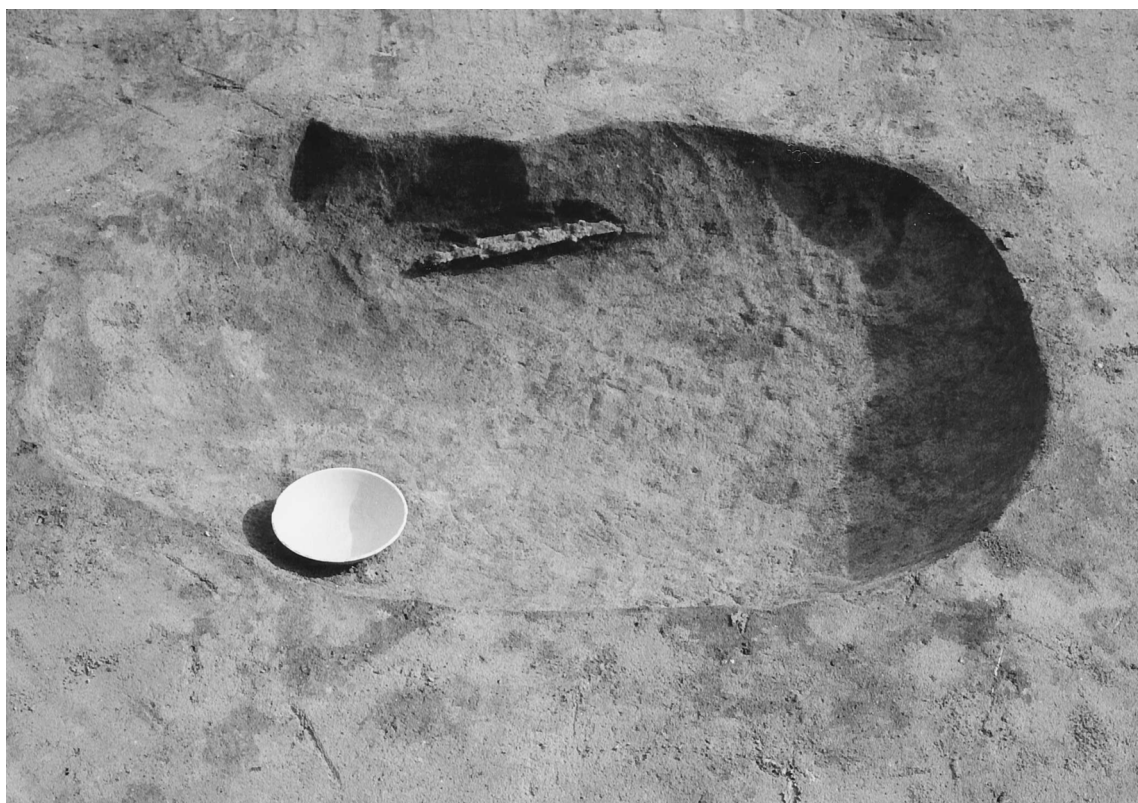


写真1 土墳墓に供えられた白磁碗と短刀

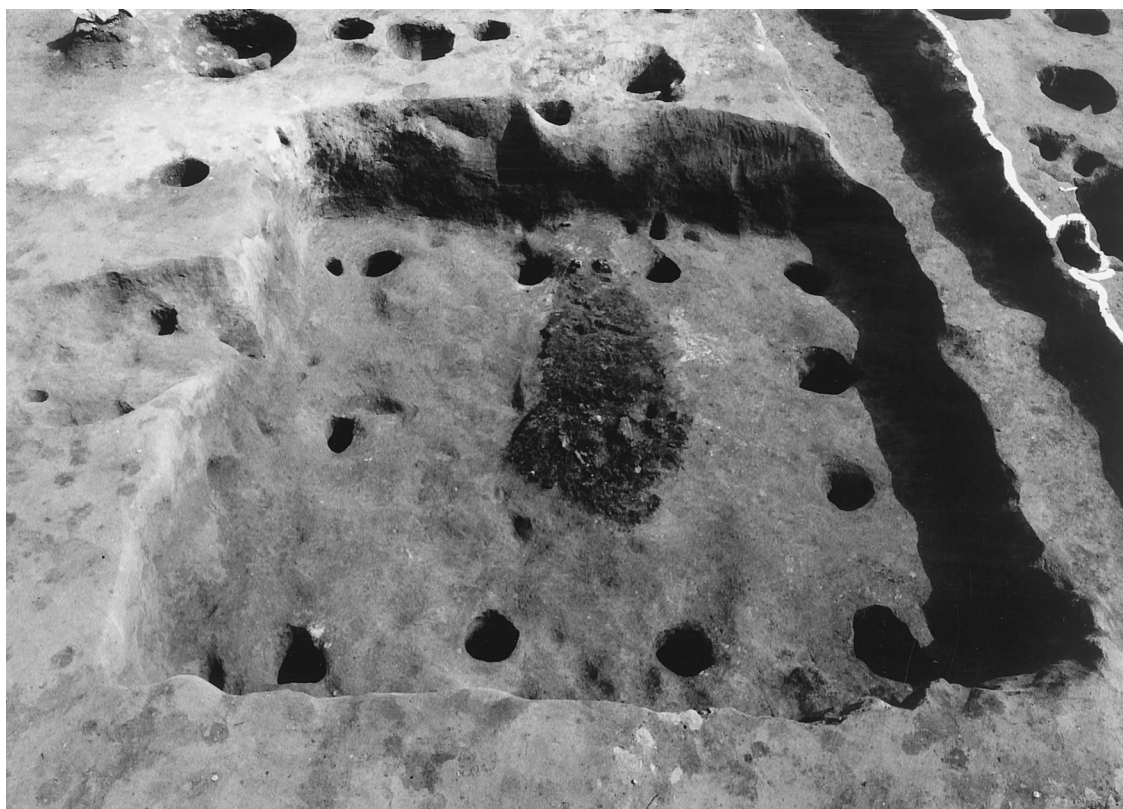


写真2 方形竪穴建物跡（床面の中央部には炭が溜まっている）



写真3 畠跡